# とある化学の接続回路 ＳＳ

櫻井　亮介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある化学の接続回路　ＳＳ

【Ｎコード】
Ｎ３９７４Ｘ

【作者名】
櫻井　亮介

【あらすじ】
学園都市最高峰の超能力を有する少年、接続回路（インターフェイス）。現代科学を超越した技術が蔓延る街の中で、彼は上層部の執行人として、時には自分自身のために、その絶対的な力を振るう。
そんな少年が暗躍する世界を、彼自身の眼で、時には彼とは異なる視点で描いていく。

※これは『とある化学の接続回路』の裏話や異なるキャラクターの視点で描くＳＳです。閲覧の際には先に『とある化学の接続回路』

をご覧になることをお勧めします。

## ＳＳ．１　８月２２日（前書き）

「本編が手詰まりだからＳＳ開始だ。覚悟しやがれ」

――――学園都市最高峰の超能力者（レベル５）――――

接続回路（インターフェイス）

## SS．1　8月22日

きっかけとは、唐突に訪れるものである。

何の前触れもなく、いきなり現れては、残酷とすら思える二択を迫る。

それが正しい選択なら大きな転機となり、それが間違った選択なら取り返しのつかない悲劇を生む。

存在を隠蔽されていた灰髪の少年にも、同じ事が言えた。

＊＊＊＊＊

8月22日、買い出しに出ていた接続回路（インターフェイス）は手からビニール袋を提げて第七学区を歩いていた。

（楽しみなんざこれくらいしかねぇからなぁ）

少年の緋色の瞳がパンパンに詰め込まれたビニール袋に向けられる。中身は8月一杯で店頭から消えてなくなる夏季限定の冷やし中華。特にこれといって熱中できる趣味もない接続回路（インターフェイス）にとって、コンビニの新商品などは彼の中に新鮮な輝きを作り出す要素となる。

「ふぁあ……くそ、眠ィ。これだから夜の残業っつーのはいただけねぇな。ちったぁこっちの体のメカニズムに配慮しろってんだ」

愚痴を零して歩く接続回路(インターフェイス)は、七分袖のシャツの胸元を広げ熱の籠もったシャツの中に風を送る。理論上は自分の能力で熱運動に軽く干渉してやれば体温を一定に保つこともできるのだが、自分の体の分子を操作するのは気が引ける。ならば、庶民よろしく団扇などで風を呼ぶ方が合理的だ。

彼は自分のアパートに向けて歩を進めていくが、ふとその体がピタリと止まった。

「……あ？」

鋭い瞳に光が宿る。

それもそのはず、角を曲がった先には原始的な武装で固めた青年たちが立ち塞がっていた。

さて、こいつらはどこに絡む連中だろう。

『幻想御手(レベルアッパー)』事件に蹴りをつけるため粉々にして埋めてやった連中のツテか。それ以前の事件関係者の弔いに現れた連中か、はたまた単なる憂さ晴らしか。

どうでも良さそうに青年たちを眺め、接続回路(インターフェイス)はため息をついて歩き出した。

「チィーッス。ちょっと待って下さいよ」

そのままスルーするつもりだった接続回路(インターフェイス)だが、通り抜けるにはあまりに幅がない。一度こいつらを伸さないことには家に帰れないというのか。

……まあ、大した問題ではないにせよ。

「これが初対面だと思うんだがよぉ……んだァ？テメェら」

適当な調子で答えると、陳腐な雰囲気を全身から発する見るからに小物集団はわらわらと数を増し、いつの間にやら囲まれる形となる。接続回路（インターフェイス）は再度嘆息し、

（数は２０……。腹ごなしにもなりゃしねぇな）

あっという間に分析を済ませた。青年の一人がにやにやしながら顔を近づけてくる。

「聞きましたよぅ？アンタ、どっかの無能力者（レベル０）に伸されちまったんだってなァ」

……はて。こいつはまた何を言い出しているのか。

「……なんのことだか知らねぇけどよ。こちとら仕事の疲れが抜けなくてイライラしてんだ。クソみてぇな戯れ言振りまいてストレス蓄積させてくるつもりなら、早ェとこ片付けちまうが構わねぇな？」

こきこきと首を鳴らして、ビニール袋を提げた少年は爛々と瞳を輝かせ青年たちに口裂け女のような凶悪な笑みを向ける。だが、そんな地味な警告を聞くことなく、青年たちは一斉に襲い掛かってくる。

「おーおー、馬鹿みてぇに一心不乱に走って来やがって」

持っているのはナイフにバット。それに対応するのは、数種類の金属。

振り上げられたバットが、引き絞られたナイフが、振り下ろされ

突き立てられる。

かに見えたが。

「え……？」

呆けた声が聞こえてきた。無論接続回路（インターフェイス）のものではない。たった今彼を攻撃しようと先陣を切った数人からだ。

それもそのはず、バットは途中から綺麗に消え失せ先端だけが地面に落ちており、ナイフは刃の部分がごっそり消えてなくなっていた。

『接続回路（インターフェイス）』。

認識したありとあらゆる物体、物質、分子、原子を分解、結合し、素粒子の操作をも行う学園都市最高峰の超能力。それが行使された時、彼を襲うあらゆる外的刺激は彼の意思ひとつで伝達を断ち切られ、粉々に砕け散る。

相手からすれば不条理とすら思える力を内包する痩身の少年は、憂さ晴らしとばかりに思い切り地面を踏みつけた。次の瞬間、青年たちを支える地面は消し飛び、代わりに深さ数メートルの大穴が口を開いた。

為す術もなく落下する青年たち。接続回路（インターフェイス）は穴の上から彼らを見下した。

「これが格の違いだよ、ボンクラ共。次からは相手選んでケンカ売れ」

言いながら、接続回路（インターフェイス）は開けた大穴を飛び越え、再び歩き出した。穴の中から聞こえる呻き声を聞き流し、何事もなかったかのように歩を進める。

今思えば、この時点で気付いておくべきだったのだろう。

力のもたらした慢心によってできた死角。

どうして非公式の存在がその姿形を覚えられていたのか、ということに。

## ＳＳ．１　８月２２日（後書き）

ＳＳを先に見た方は初めまして、本編をご存知の方にはごめんなさい、櫻井です。

前書きに書きました通り、本編がとんでもないスランプに陥っていますので、こちらでサブストーリーを書いていきたいと思います。もちろん、不定期更新となりますが本編の方も並行して進めていきたいと思います。

おそらく接続回路以外の視点が多くなるＳＳ、本編で穴埋めできなさそうな点を（もしくは過ぎてしまった夏の出来事などを）こちらで補っていくつもりです。シリアス分多めの本編とは違いこちらは明るい話が多いつもりですので、本編にはないこの作品の一面を見ていただけたらと思います。

## SS．2　7月17日（前書き）

「私と勝負する前にこんなことがあったのね……」

――学園都市第三位の超能力者（レベル５）――　御坂　美琴

## SS．2　7月17日

現代科学をはるかに超えた技術力を持つ新世代衛生都市である学園都市は、２３０万もの人口を誇っている。

その内八割は学生ということもあり、街を歩いていて見掛けるのはほとんど学生だ。

彼らは無能力者（レベル0）、低能力者（レベル1）、異能力者（レベル2）、強能力者（レベル3）、大能力者（レベル4）、超能力者（レベル5）と格付けされ、それによってある程度環境の差異が生まれることがある。

奨学金によって不自由なく生活できる者も居れば、親からの仕送りで生活する者も居り、はたまたバイトをして生計を立てる者も居る。

こういった環境の中、所謂『貧乏学生』にとって、聖戦と呼ぶべき一大イベントがあることを忘れてはならない。

――――――そう。

スーパーの特売日である。

＊＊＊＊＊＊

第七学区の一角、多くの店が立ち並ぶ商店街に、茜色の髪の少女は居た。
少女の名は深怜錯弥（みれい さくや）。
レベル４の空間移動（テレポーター）系能力者である彼女の虚ろな視線の先には、赤い生地に白い文字で『特売！』と豪気に書かれた旗がバタバタと風に揺れている。

今日は風が強い。

学園都市最高峰の頭脳と評される長点上機学園の制服に身を包む錯弥を端から見れば、『何であんなハイレベル校の才女がこんなところに！？』と驚かれるかもしれない。規定の長さ、と言っても短いスカートが靡く度目に映る白い太腿に生唾を飲み込む男子生徒が数名居ることも気に留めず、というか気付かず、錯弥は来るべき聖戦までの時間を確認する。

（……後、２分……）

腕時計で確認を終え、錯弥は自分の周りへと目を向けた。戦に参加するのは、錯弥とそう変わらない年代の学生たちと、数人の奥様方。あらかじめ必要な特売品はチェックしているから、後はそれぞれの配置さえ把握してしまえばこの戦に生き残り勝利できる。

今の錯弥はギリギリまで節制節約しなくてはならない立場にある。というのも、仕送りで生活する彼女の下に、未だに今月分の振り込みが為されていないからだ。バイトをしようにもそちらからの振り込みまでにも時間はかかるし、何とかして親からの仕送りまで食い繋がなくてはならない。ということで、才色兼備な錯弥嬢は現在、テレビでやっていた節約術をフル活用する生活に身を置いているのである。

故に、これは勝たねばならぬ決死戦。
譲れば果てる、それほどまでに追い詰められた少女の聖戦が今、始まろうとしている。

店員らしい男性が、店の外に現れた。手の中にはメガホン。店の中にもメガホンを持った店員が居る。

始まる。

時計を見ずとも、飛び出すタイミングがわかる気がした。

刹那、１７時を告げる鐘は店員の声と共に、戦の始まりを告げるゴングと化す。

＊

『うおおおおおおおおおおおおおぉぁぁぁぁぁぁぁぁ！！』

一斉に駆け込んだ戦士たちが、我先にと特売品に目を血走らせ、陳列棚へと手を伸ばす。
外見だけ見れば低血圧系少女である深怜錯弥も、雄叫びこそ上げないものの無駄に洗練された無駄のない動きで戦場を駆け抜ける。
ここに居る何人かは能力者なのだろうが、激安の戦場はそういった能力による差異を感じさせない。むしろ能力者ではない、経験豊富な奥様方の方が錯弥たち学生よりも優位だった。錯弥以上に洗練された方向転換、店員の声に鋭敏に反応し経験の浅い少年兵たちの間を抜けていくその様は、まさに百戦錬磨の猛者の風格を漂わせている。

力でも若さでもない、経験値がものを言う安売りの戦場。研究してきたとはいえ、初陣の錯弥には厳しい環境だった。それでも、錯弥とて譲れないものはある。あの韋駄天奥様数人組には劣るとしても、同じ学生ならまだ勝機はある。

タンパク源となる激安卵を籠に入れ、錯弥はフライの陳列棚へと向かう。何と、そこにはまだ激安えび天が残っていた！数はひとつ。物欲食欲のない錯弥だが、どうせならいいものを食べたいと思う人間の本質は持ち合わせている。

錯弥の細い腕が伸び、えび天のパックに触れた時。

パックの反対側で、自分のものではない手がパックに触れていた。

すいと顔を上げ、相手を確認。相手はツンツン頭の黒髪をした制服姿の男子生徒。

向こうもこちらへ目を向けるや、引きつった笑顔を浮かべ、

「今のは俺の方が先……だったよな？」

と、口に出した。そんなはずはない。

「……違う、私の方が先」

譲ることなく、錯弥は男子生徒に言い返した。すると男子生徒はふるふると頭を左右に振って、

「いいやっ！！今のは確実に俺の方が先だったね！！その証拠に見ろ、わずかに重なった指の下になっているのは俺の指だ！！」

「これはただ私がパックを掴んだ時に勢いで指がずれただけ。そこに君の指が入り込んだ。それだけのこと」

「じゃあドローと言うことで、ここは公平にジャンケンで決め」
「時間の無駄。早く手をどけて」
「無駄とは何だ無駄とは！ここでこのえび天が手に入るか入らないかで居候付き上条さんの取り分が大きく変化するんだ！！」
「じゃんけんぽい。私の勝ち」
「不意打ちッ！？ちょ、待て待てフェアじゃねぇぞっ！？」

騒いでいると、錯弥の目にどんどんあちこちの陳列棚から物が消えていくビジョンが映り込んだ。このままこの上条とか言う男子生徒とえび天合戦をしていては敗残兵になってしまう。

「……仕方ない。えび天の決着は後でつける」

言って錯弥はパックから手を離し、上条にそれを譲ったかに見せ、

「……お店から出たら動かないように。『後で』ジャンケンでもなんでもして公平に決着をつける」

「え？あ、ちょっとおま…」

上条が何か言う前に、錯弥は再び混沌とした戦場へと駆けていった。

＊

１７時２０分。

わずか２０分間の過酷な戦いから生還した錯弥は、袋一杯の特売

品を手に店の外に出た。
見回してみると、自販機の側のベンチに腰掛けた上条がこちらに気付き、立ち上がって歩み寄ってくる。
「……よく待ってた。普通なら無視して逃げそうなものなのに」
「んー、普段通りならそうするとこなんだけどよ。手に取ったのはスーパースローでも使わねえと分かんないくらい同時だったし、ただ帰るんじゃ心象がねえ」
思ったより律儀な性格らしかった。バーサーカーというのか、戦いを終えた上条からはあの時のような『ある意味覇気』を感じない。錯弥は感心したように「……ふぅん」と呟いて、
「それじゃ、予告通りジャンケン。お金は払うから」
「あ、それなんだけど」
グーにした手を上げると、上条が口を挟んだ。
「実は卵買い忘れちまったんだ。お前2パック持ってるみたいだから、卵ひとパックとえび天ひとパックで交換するってどうだ？」
「交換……」
実際、悪い話ではない。錯弥は早いうちに卵の陳列棚に辿り着いたため、お一人様2パックまでのルールを守って2パック買ったが、一人暮らしの錯弥より居候が居るらしい上条の方が卵も使うだろう。
……というわけで。

＊

帰路につく錯弥のビニール袋の中には、卵２パックの代わりにえび天のパックが入っていた。

しばらくは、卵を使わない料理に徹する必要がありそうだ。

## SS．2　7月17日（後書き）

今回は本編第九章で遅まきながら登場した深怜錯弥の視点です。超電磁砲にて上条さんが言っていた「全滅だ……貴重なタンパク源が（ｒｙ」の少し前になります。

ここで初めて錯弥が長点上機学園の生徒であることを明かしました。本編ではほぼ無双の活躍をしていた彼女はオリキャラの中では好きな方でして（笑

こんな感じで今後色々なキャラクターの視点で展開していこうと思います。

それでは皆さん、これからも、もしくはこれから、どうぞよろしくお願いいたします！

## SS．3　9月13日（前書き）

「例の分岐点の少し前です、とミサカは注釈を加えます」

――――妹達認識番号（シスターズリアルナンバー）１０４１２号――――　多重観測（エクスプローラ）

## SS・3　9月13日

この日、上条当麻は今や親しんでいると言っても過言ではない不幸の数々にいつものように見舞われていた。

オーソドックスな制服はびしょ濡れで、何度目かになる鞄浸水はさして必要ともしていない教科書をべこべこのしわくちゃにしてしまっている。

一体誰が、こんないい陽気の中でずぶ濡れになると予想するだろう。傾ければ、ペットボトルからジュースをコップに注ぐが如く水が漏れ出す。それもこれも、デパートの火災報知器が誤作動したせいだ。

上条当麻が用を足しているその上で降り注いだ人口の雨さえなければ、こんな彼にとってはありふれた悲劇も起こらなかっただろうに。

と、まあ相変わらずの不幸人生にため息をつきながら、上条は夕暮れの街をとぼとぼと歩いていた。

その目線の先に。

「……あれ？あいつ……」

見覚えのある茶髪の少女がそこに居た。学園都市でも五本の指に入ると言われる常盤台中学の制服を身に纏う、エースと召される超能力者（レベル5）が。

「おーい、御坂」

「……っ」

確信して声を掛けると、道路を跨ぐ空中通路から眼下を眺めていたらしい御坂美琴が息を呑んだ。

「どうしたんだよ、お前らしくない」

「……」

おや、やはり雰囲気がいつもと違う。上条はボリボリと頭を掻いて、

「えーと、またなんかあったのか？前に会った時に妹達（シスターズ）の件は無事に――――」

「……実はね」

美琴の声が、上条の声を遮った。彼女は凭れていた手すりから身を離し、顔をこちらに向ける。

勝ち気な表情はそこになく、あるのは年相応の少女らしい不安そうな、虚ろな表情だった。これは確実に、ただならぬ何かが起こっている。

「また、なのよ」

「また？」

『また』。そのたった二文字の作り出す副詞だけで、上条は不思議と美琴の口から飛び出そうとしている問題がわかる気がした。強気な少女にこんな表情をさせる問題など、彼はひとつしか知らない。

「またあの子達が……『妹達(シスターズ)』が、あの時みたいな実験に利用されてるの」

やはり。

的中して欲しくない予想が見事に的中し、上条はすいと目を細めた。

絶対能力進化(レベル6シフト)実験。

学園都市最強の超能力者(レベル5)一方通行(アクセラレータ)と、御坂美琴の量産複製人間である妹達(シスターズ)を利用した、一方通行(アクセラレータ)を無敵の能力者に進化させるための実験。１００３１体の妹達(シスターズ)が犠牲になったこの実験は、８月２０日に上条が一方通行(アクセラレータ)を倒すことによって凍結されたはずだった。

では、美琴の言う『また』とは凍結解除を意味するのだろうか。無能力者(レベル0)が超能力者(レベル5)を破ることによって実験の理屈を根本からひっくり返したのだから、無意味であることはわかっているはずなのに。

「多重能力者(デュアルスキル)って知ってる？」

「多重…能力者(デュアル…スキル)？」

聞き慣れない単語に、上条はほんの少し戸惑いながら問い返した。

「一つの体に複数の能力を持つ能力者のこと。理論上不可能ではないとされているけど、長点上機学園の技術を持ってしても未だ実現できていない未知の領域。研究者たちからすれば、出来が悪くても理論の証明のためにそれを生み出したいわけ。……ってなったら、どうすると思う？」

「おい待てよ……ってことは、妹達（シスターズ）がその実験台（モルモット）になってる……ってのか？」

言うと、美琴は目を伏せて頷いた。上条の頭に血が上っていく。

「『多重能力進化実験（デュアルスキルシフト）』って呼ばれてるらしいわ。２００体の妹達（シスターズ）に特殊な改造を加えて、多重能力者（デュアルスキル）にしようって言うね。その完成度の査定官として用意されたのが、統括理事会直轄の『非公式（シークレット）の超能力者（ナンバー）』。その名の通り、能力も素性も公にされていない超能力者よ。一方通行（アクセラレータ）の時とは違ってどんな奴かもわからないけど、そいつを倒すことができれば実験を食い止めることができる」

淡々と語られる実験の概要。上条は拳を握りしめ、

「そうすれば、この実験もあの時と同じように食い止められるんだな？」

「多分ね。２００人全員を同じ条件の相手と戦わせないとデータにならないから、今はもう良くも悪くもやり直しが効かない状況にある。……今度の相手は一方通行（アクセラレータ）じゃない。今回は私が蹴りをつけ」

「行かせねえよ」

語気を強くし、上条はずぶ濡れの制服の胸に手を当てる。

「話された以上は俺も放ってはおけない。わかって言ってんだろ？それに今回の相手は一方通行（アクセラレータ）の時と違ってどんな能力なのかもわからない能力者。わざわざ非公式にされてる八人目だ、下手したら一方通行（アクセラレータ）以上に危険な能力者かもしれねえだろ。だったら俺がいく。お前と違って、俺の右手は理屈なしにそいつの能力を無効化できる。だから俺に行かせてくれ」

「……まぁ、あんたが協力してくれるのはちょっと期待してたんだけどね。じゃあ、今回は二人で――――」
「いや、行くのは俺一人だ」

実験の被験者こそ違えど、実験に携わるのが学園都市の頂点クラスの人間であることに変わりはない。この実験に『査定官』としてその能力者が抜擢された理由も、おそらくは一方通行のように『強い』からだ。それを撃破、もしくは翻弄するくらいでなければ、多重能力者としては未完成、そういう考えの上での実験だと予想できる。

つまり。

「あの時と同じだ。『俺』があの時みたいにそいつを結果的に倒すことができれば、それこそ実験を凍結する理由になる。第三位のお前も居たんじゃ、『第三位が居たなら負けても仕方ない』ってことになりかねない。そりゃ、前回はお前や妹達（シスターズ）がいなけりゃ危なかった。でも、まずは俺に任せてくれないか？」

「……わかったわよ」

肩を竦めて、美琴は言った。上条のこの反応は予想していたのかもしれない。事実、こうせざるをえない、こうした方が効率がいいと思っていても、またも上条に負担させなくてはならないことを快く思っていなかったというのもある。葛藤の末の選択は、やはり削られていく命をひとつでも少なくする方法だ。

「その代わり、必ずあの子たちを助けて。一人でも多く、ね」

「ああ、約束する」

＊

今日の実験は、第１７学区の工事現場で行われる。工事現場と言っても、もう建設計画は中止となり、中途半端なまま放置されているとのことだ。学区の隅にあるそこならば、人目も少ないと判断したのだろう。

すっかり日の落ちた学園都市は、上条にあの日のことを思い起こさせる。

あれで終わったものと思っていたのだが、それは間違いだったようだ。

どうしてあの妹達（シスターズ）には、闇が付きまとうのか。

闇で生まれたからだ。

だが、闇で生まれたからと言って永遠に闇をさまよい続ける必要などない。きっと闇で生まれた人間でない自分には、完全に彼女たちを救い出すことなどできないだろう。遠ざけることはできても、悪夢の手が絶対に届かないようにすることは自分には不可能だ。

だからそれは自分の役目ではない。

今の自分の役目は――――――ただひとつ。

目の前に、伏せる妹達（シスターズ）が映り込んだ。その側には、灰色の髪を揺らす細身の少年。

あれが、美琴の言っていた『非公式（シークレットナンバー）の超能力者』。

ここからでは顔は見えないが、どこか、どこか一方通行（アクセラレータ）に似た雰囲気を感じた。残虐な行為の中に混じる複雑な感情の波のようなものが。それがなんであろうと、上条には関係ない。

いかなる理由があろうとも、こんな行為は間違っているのだから。

故に、上条当麻は叫ぶ。

「やめろぉっ！！」

超能力者の動きが、ピタリと止まった。

ゆらりと、不気味に顔をこちらに向ける。

そこには、雰囲気から感じた以上に一方通行そっくりな顔があった。

色素の薄い髪といい、血のような緋色の瞳といい、不健康なほどに白い肌といい。

目の下に深く刻まれた隈を除けば、それは一方通行（アクセラレータ）そのものと言っても過言ではないほどによく似ている。

その凶悪さを秘めた瞳を真っ直ぐに見返して、上条は再度告げる。

「そいつにこれ以上手を出すな……今すぐそいつから離れろっ！！」

再び起こった新たな悲劇を、自らの拳で食い止めるために。

## SS．３　９月１３日（後書き）

どうも、櫻井です。こっちばっかり更新で申し訳ない（汗

今回は９月１３日、接続回路と上条さんのタイマン直前のお話でした。

これを機に本編の１－７もだいぶ編集しましたので、目を通してみてください。

それでは次回、お楽しみに

## SS．４　１０月３日（前書き）

「苦手なモンが増えやがった……」

――――学園都市最高峰の超能力者（レベル５）――――

接続回路（インターフェイス）

## SS・4　10月3日

（……）

接続回路（インターフェイス）はとあるペットショップに居た。理由は簡単。彼が庇護している妹達（シスターズ）の一人、多重観測（エクスプローラ）に飼わせる事にした猫のための飼育ケースを買いに来ているのだ。

当の多重観測（エクスプローラ）はといえば、例の子猫を両手で抱えたままファンシーなショップ内をニヤニヤしながら見回している。

無骨なゴーグルを装着していることを除けば、彼女はこの店にいても全く不自然さのない容姿をしている。だが、ここまで彼女を連れてきた――目についただけだが――接続回路（インターフェイス）の方がはるかに不釣り合いであった。ぼさぼさに伸ばした灰色の髪と威嚇するような緋色の瞳や隈は、見るからに危険な雰囲気を辺りに振りまいている。接続回路（インターフェイス）自身がある程度の自覚はあるし、むしろ近寄ってくる人間の方が不思議だったりする。

しかも、それらは大概接続回路（インターフェイス）の犯した罪を知っている人間たちだ。

あのお節介な研究者やその友人、そして多重観測（エクスプローラ）もイレギュラー。

だから。

「いっ、いらっしゃいませぇー……」

こんな店に勤めている人間からすれば、彼の姿はさも異常に見えていることだろう。これが通常の反応なのだ。

接続回路（インターフェイス）はわざとらしく舌打ちして、多重観測（エクスプローラ）の方を親指で示すと、

「この猫を飼うためのケースを探してる。テキトーに……」
「どうせならこの子が過度のストレスを感じない、開放的且つ遊び心に満ちたお家を与えたいところです、とミサカは要望を口にします」
横から多重観測（エクスプローラ）が顔を出す。接続回路（インターフェイス）は向けていた指ごとポケットに収め、小さくため息をついた。
「……だとよ。金はちゃんと払って帰ってやっから、オーダーに沿った一番イイモンを寄越せ」

＊

数十分後、店の外で接続回路（インターフェイス）は空を見上げていた。日はまさに落ちつつあり、学園都市から暖かな光が消えつつある。もう半刻も過ぎる頃には、この辺りは人口の光で染め上げられることだろう。
（クソ猫一匹のために何やってんだかな……俺ァ）
接続回路（インターフェイス）という少年は、つい１ヶ月前までこんな買い物とは最も縁がない人間だった。必要最低限、自分が生きるのに必要なものだけを求め、年齢を踏まえれば莫大とも言える額の財産も９９％は手付かずだ。年齢だけなら高校生だというのに、高校生らしい嗜好などまともに持っていない。
それを今この子猫、引いては多重観測（エクスプローラ）のために使っているわけだが。
（……こんな汚ねぇ金で、コイツらを養う、ね。……笑えねぇな）

人を殺して稼いだ金で、人の笑顔を買う。

腐りきっていると、自分でも思う。

だが、それでも。

「白虎、これであなたもミサカ達と一つ屋根の下で暮らせますよ、とミサカはこれでもかと揺さぶって祝福してみます」

この少女に『シアワセ』を与えるためなら、それも構わないと思えるのだ。

「はぁ……かったりィ。サッサと帰んぞ」

重力子を荷物から少し削ぐことで軽くしながら、接続回路（インターフェイス）は心底面倒くさそうにぼやいた。

その時である。

「ぐがぁ〜……」

「あん？」

道中、接続回路（インターフェイス）は耳障りな音を聞いた。いや、正確には人間の声、さらに突き詰めれば鼾のようなものだったが、何となく音源の方に目を向ける。

そこには一人の女性が居た。

真っ赤なポストに頬擦りしながらしがみついている妙齢の女性だ。

相当酔っているようで、ぶつぶつと何かを呟きながら真っ赤な顔で鼻提灯を膨らませたりしている。
接続回路（インターフェイス）は見るからに嫌な顔をした。
酔っ払いという、常識人から見てもかなり厄介で面倒な手合いを前に、嫌な予感が、徒労の気配が、彼の脳内に警戒信号となって駆け巡っている。ある時は純白の暴食シスター、またある時は小さな妹達（シスターズ）の司令塔。ここ最近の自分には、女難の相でも出ているんじゃないかというレベルで面倒なイベントが襲い掛かってくる。
一瞥して『早ェトコ通り過ぎんぞ』と決めた接続回路（インターフェイス）は一歩先へ進んで、再度酔っ払いへと目を向けた。

（……この女の顔……）

接続回路（インターフェイス）は酔っ払いの顔を間近で覗き込み、背後の多重観測（エクスプローラ）を振り返った。表情筋の柔軟さこそ違えど、御坂美琴ほどではないがそっくりだ。遺伝子レベルで考えれば誤差はわずか、と言ったところか。

（コイツ、第三位の繋がりか）

おそらくは姉……少なくとも二親等以内の遺伝子レベルであることは間違いない。となれば、

「先に行け多重観測（エクスプローラ）。この女に姿を――――――」
「あっれぇみことちゃーんどしたのーこんな時間に出歩いちゃってまーてかなにこの目つき悪いのあの男の子から乗り換えたのかてか乗っかってもなかったっけあーなんかもーいいやー」

硬直。

接続回路(インターフェイス)は拳を握り締め、はああ…と大きなため息をついた。
暗部に真っ逆さまの状態でまさかの酔っ払い応対イベントの始まりだ。

「接続回路(インターフェイス)……。この方は一体？とミサカは深い繋がりを予感しつつ尋ねてみます」
「いんたーふぇいす？どしたのみことちゃん、雰囲気ちがうぞー。ましゃか、この顔色悪いのにへんなことされておかしくなったんじゃないでしょうねおかーさん許さないわよウチの娘をかえせー！！！」
「状況も掴んでねぇくせに妄言吐いてんじゃねぇ！！」

突如胸倉をすごい力で掴んできた女性に怒鳴り、接続回路(インターフェイス)はその腕を退ける。当の女性は「やるかー？どっからでもかかってこいぃー！」とフラフラの足で奇妙なポーズをキメていた。
あまりにも馬鹿馬鹿しくなってきて、接続回路(インターフェイス)は踵を返し、

「……付き合ってらんねー。おい、行くぞ」

と飼育ケースの箱を持って歩き出したのだが、

「逃げるかぁひきょーものぉ！！」
「ごぁっ！？」

女性の飛び膝蹴りを喰らってもろに地面に倒れ込んだ。

「……っ、」

ぶるぶると拳を震わせ、接続回路(インターフェイス)はうつ伏せの背中にのしかかって「戦はこれからじゃー！！いざかみゃくらー！！」と訳の分から

ないことを言っている女性に叫ぶ。

「テメェは一体何なんだよ！？ここまできたら酔っ払いなんつぅ都合のいい免罪符は通らねぇぞゴラァ！！」

とうとう頭に血が上った接続回路（インターフェイス）。無理矢理に起き上がり、酔っ払いという名の暴君を地面に振り落とす。そのまま殴りかかりそうだったが、地面にずり落ちた瞬間、女性はだらしない顔で再び夢の世界に帰っていた。

まさかの肩透かしを喰らった接続回路（インターフェイス）は、何も言わずに体から力を抜いていく。というか勝手に抜けきって、その場に座り込んだ。

「……夢にしてぇのはこっちだっての」

さらに隈が濃くなってしまいそうだと、ぼんやり思う。気を取り直して、接続回路（インターフェイス）は放り投げられる形になった飼育ケースの箱を持ち上げた。

「……接続回路（インターフェイス）」

「あ？」

酔っ払いをそのままに歩き去ろうとしていると、慌てて側まで来た多重観測（エクスプローラ）が酔っ払いを指差し、

「この方はお姉様……第三位の母親、なのですか？とミサカは先ほど聞いた発言を反芻しつつお尋ねします」

そういえば、「おかーさん」などと口走っていた気がする。接続回路（インターフェイス）はボリボリと頭を掻いて、

「酒の回ったヤツの言う事を信じるならな。まぁ、所謂肌年齢なんつーモンは食生活やらストレスの溜め込み具合なんかでいくらでも若返っから、その可能性も無いわけじゃねぇ」

「だとすれば、遺伝子自体はミサカの『お母さん』、という考え方もできるのでしょうか、とミサカは重ね重ね質問します」

「……遺伝子だけならな」

もしも多重観測（エクスプローラ）に母親が居るとしたら、それは計画の研究者になるところだろう。

いや、腹を痛めて生んでいない限りは、それは真の親子関係とは違うのかもしれない。他人の子供や試験管で作った子供に対して愛情を注げない、というのはよくある話だ。

――――――痛めすぎて死に至るケースもあるわけだが。

「……！」

ぞわり、と。

妙な悪寒が背筋を走った。

思い出したくないことを思い出しかけた瞬間だった。

特徴的なライトが備え付けられた場所で、こちらを何人もの人間が覗き込んでいる、そんな一枚のビジョン…。

「接続回路(インターフェイス)？」

ふと、視界にひょこりと多重観測(エクスプローラ)が入ってきた。接続回路(インターフェイス)は何とか体を落ち着けて、いつもの表情を取り戻す。

「……何でもねぇよ。そら、さっさと冥土帰(ヘヴンキャンセラー)しんトコ戻るぞ」

何故か落ち着かなくなった体に違和感を感じながら、接続回路(インターフェイス)はようやく帰路に就いた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3974x/

---

とある化学の接続回路 ＳＳ

2011年11月14日16時50分発行